

INDEX

ことば徒然

言語性を伸ばす指導

ことば徒然

人は、自分が表現したことを受け止められると、うれしいものです。
子どもの場合も、同じようにうれしいし、この人ならといった安心感も育ちます。

この安心感が新しいことにも取り組んでいこうかな、一度やってみようかなという気をおこさせます。

しかし、子どもの周りには大人がいつもいつも子どもの表現に答えられるわけではないでしょう。

兄弟もいます。

家族もいます。

家事や仕事もあるでしょう。

そんなときは、子どもと1対1で過ごす時間を決めて、その限られた時間に、しっかり、子どもの表現に答えることです。

家族で食事をするとき、子どもがねるとき、子どもと過ごせる時間に子どもの話しの耳を傾け、答えることです。

子どもは、欲求を満たされることで、安心感をもち、それをエネルギーとして、子どもは自立にむかうことができます

言語性を伸ばす指導

皮をむくようにして、口に持っていきながら「(みかん)を たべる。」

先生がみかんを食べています。ぼくも食べたいとき「ぼくも (みかん)を たべたい。」

好きな食べ物を言うとき「ぼくは (みかん)が すきです。」

比べると「りんごよりもみかんが好きです。」

好きな食べ物がたくさんあって、「ぼくは みかんも すきです。」

その様子を見て「おかあさんが（みかん）を たべています。」
たくさんの食べ物の中で「これが ぼくの すきな（みかん）です。」
きのうの昼食の後「ぼくは すきな（みかん）を たべました。」
食べている理由をつけて「ぼくは のどが かわいたので みかんを たべま
した。」

のどが渴いている弟に「ぼくは すきな（みかん）を おとうとに あげま
した。」

いろいろな表現方法をリピートしてもらいます。

短期の記憶ができることを願ってリピートしてもらいます。

一度やったから、何回か指導したからと言って、いつでもどこでも正しく使え
るとは思っていません。

聴覚的な刺激になればと思い、リピートしてもらいます。

漂泊鳥から

やっと涼しくなってきました。

「ことばだより」の感想は「もりの掲示板」にお寄せください。

ことばだより 第 39 号

ことばのもり 2003.9.17

INDEX

ことば徒然

言語性を伸ばす指導

ことば徒然

子どもと母親のこんな光景を見たことがあります。

子どもは表情や手の動きで「それがほしい」「それは食べたくない」といった意
図と情動を表現しています。

母親は子どもの表情や手の動きから子どもの意図や情動を読み取り、行動して
いきます。

小さい子どもさんを連れのお母さんです。

お母さんが子どもに、

「これがほしいの？」とお皿をとっては

子どもに確かめています。

子どもは、その皿を見て、

「うーん」

とおこった顔を見せたり、笑顔を見せたりしています。

手をばたつかせたり、伸ばしたりしています。

ことばをまだ話せない子どもが顔の表情で、手で

「お母さん、それは食べたくないよ」「それを食べたいよ」と

話しているようでした。

このような母親と子どもとの意図や情動の共有が、子どもが親のことばを理解する基盤になるのです。

言語性を伸ばす指導

車の絵カードを見せて

「タイヤはいくつある？」

と問います。

絵カードに描かれているタイヤの数を答える子がいます。

「本当はいくつ？」

ともう一度問います。

本当の車をイメージできていないと答えられません。

漂泊鳥から

もうすぐ運動会です。

ことばだより 第38号

ことばのもり 2003.9.10

INDEX

ことば徒然

ことば徒然

ホームに乳母車を押してくるおばあさんとお孫さんがいました。
その子は、1才くらいでしょうか？

電車が近づいてくるのをじっと見つめていました。

おばあさんは、しきりに

「かんかんかん。」

「かんかんかんにのるよ。」

「いいね。」

と話し掛けています。

その子は駅を通り過ぎ、遠のいていく電車をじっと見て、手をうっていました。

おばあさんは

「かんかんかんだね。」

「いったね。」

と声をかけています。

待っているホームにも電車がやってきました。

子どもがさっきより大きな声で

「かんかんかん」

と言いました。

通過していく電車の風を感じたのか、声をあげて子どもは喜んでいました。

そのとき、おばあさんは

「びゅーんだね」

「はやいね。」と声をかけています。

電車に乗り、座席に座ると その子はおばあさんに抱かれて、隣にすわりに来ました。

おばあさんが、その子の靴を脱がせ、すわらせました。

反対側を走る電車を見ては

「かんかんかん」

と言っています。

おばあさんも

「かんかんかん」

「かんかんかん、はやいね。」

「でんしゃ、いっぱいね。」

と子どもさんのまねをしながら、ことばがけをされていました。

「共有していることが多いな」と思いました。

その子が何を見ているのか？

何を待っているのか？

何を楽しみにしているのか？が

おばあさんにはわかったのでしょうか。

その気持ちにおばあさんがことばがけをしていました。

子どものことばを使って、・・・。
子どもが見ているものを見て、子どもが感じていることを感じる。
そのときに出てくる子どものことばを大人が模倣する。
そして大人がもう一つ新しいことばを入れて話す。
そのことばを子どもが模倣するまでくりかえす。ここからことばが育っていく。

漂泊鳥から
残暑が厳しいですね。

ことばだより 第 37 号

ことばのもり 2003.9.3

INDEX

ことば徒然
言語性を伸ばす指導

ことば徒然

連発、引き伸ばし、難発の症状が現れる頻度はどれくらいだったら吃音というのだろうか。

それらの症状が、100 語中 10 回以上でてきたら吃音というのか、それとも 3 回以上なのか。

10 回と 3 回では、ぜんぜんちがうように思うが。

3 回くらいなら、日常生活の中でたまに経験することもある。

10 回以上でるときなのか。

他の同年齢の子どもとくらべて、目立つ場合に吃音というのか。

目立つというのはどれだけ症状ができれば目立つのか。

3 回くらいでは目立つとはいえないだろう。

確かに、話をしている 1 割以上出れば、どうしても目立ってくるだろう。

それとも本人の自覚があれば、吃音というのか。

2~4 歳台にあらわれる幼児吃は成長とともに大半は消えていく。

彼らの非流暢性は正常な範囲だったと言える。

3 回なら、非流暢性は正常な範囲にあると言えるだろう。

そしてあるものは、幼児吃が消えないのでこっていく。

幼稚園年長そして小学1年生2年生と過ぎたころに自覚が始まるといいます。
吃音歴が長くなればなるほど、内面的な問題は深刻化するといわれています。
自覚するまで吃音といわないのなら、吃音が進展してしまう。
適切な指導の時期をのがすことにもなる。
確かに何もしないで消えていく場合もあるが・・・。
なにもできないのか。

言語性を伸ばす指導

りんごの絵カードを机の上において、
「りんごはどこにありますか」
答えを待ちます。
答えが返ってこなければ、
「りんごは机の上にあります」
と言って、リピートさせます。
次にはりんごの絵カードを机の下に置いたり、筆箱の左側に置いたりして、表現させます。
こうして、位置を表すことばの習得を図ります

漂泊鳥から
2学期がはじまりました。
残暑厳しいですが、スタートダッシュ。

ことばだより 第36号

ことばのもり 2003.8.27

INDEX

ことば徒然
言語性を伸ばす指導 絵カードを使って

ことば徒然

連発、引き伸ばし、難発の症状が現れる頻度はどれくらいだったら吃音というのだろうか。

それらの症状が、100 語中 10 回以上でてきたら吃音というのか、それとも 3 回以上なのか。

10 回と 3 回では、ぜんぜんちがうように思うが。

3 回くらいなら、日常生活の中でたまに経験することもある。

10 回以上でるときのなのか。

他の同年齢の子どもとくらべて、目立つ場合に吃音というのか。

目立つというのはどれだけ症状ができれば目立つのか。

3 回くらいでは目立つとはいえないだろう。

確かに、話をしている 1 割以上出れば、どうしても目立ってくるだろう。

それとも本人の自覚があれば、吃音というのか。

2~4 歳台にあらわれる幼児吃は成長とともに大半は消えていく。

彼らの非流暢性は正常な範囲だったと言える。

3 回なら、非流暢性は正常な範囲にあると言えるだろう。

そしてあるものは、幼児吃が消えないのでこっていく。

幼稚園年長そして小学 1 年生 2 年生と過ぎたころに自覚が始まるといいます。

吃音歴が長くなればなるほど、内面的な問題は深刻化するといわれています。>

自覚するまで吃音といわないのなら、吃音が進展してしまう。

適切な指導の時期をのがすことにもなる。

確かに何もしないで消えていく場合もあるが・・・。

なにもできないのか。

言語性を伸ばす指導 絵カードを使って

その 5

パンダの絵カードを見て、リピートさせます。

「これは パンダです。」

「これは パンダという どうぶつです。」

「これは ささのはを たべる パンダという どうぶつです。」

「これは だいすきな ささのはを たべる パンダという どうぶつです。」

短期記憶をし、自分で表現する力を確認しています。

漂泊鳥から

INDEX

ことば徒然

言語性を伸ばす指導 絵カードを使って

ことば徒然

「吃音者には過去と未来だけがある。吃音にまつわる不快な記憶と発話への懸念を捨てさせ、今、この時点で吃音にどう対処すべきか、その方法を吃音児・者に教えなければならない。」

彼ら（今まで指導してきた吃音の子）の吃音の症状の変動性は大きく、自由な会話では吃音の症状はみられず、突然、難発がでてきたりします。

さらに吃音の症状の進行はあまり見られず、吃音の進展段階を評価すれば、軽いものです。

しかし吃音歴が長くなればなるほど、吃音を意識した症状はふえていきます。

話をしていて、突然、難発がでてきて驚きます。

それまでの会話で本人は「できそうな気がする」「でたらいやだな」「どうしよう」と話していることを心配していたと思います。

その思いが現実になることで、不快な記憶として残っていきます。

それによって、マイナス思考の回路がはたらき、吃音の進行に影響するマイナス要因はより深刻化し、吃音の体験は増えていく。

言語性を伸ばす指導 絵カードを使って

その4、

この車のタイヤは、いくつありますか？

片側から見て、車が描いてあります。

タイヤは二つだけ見えています。

反対側にも二つありますから、正しくは四つです

このバスのタイヤはいくつありますか？

絵カードで見えるタイヤの数は、三つです。

しかし反対側にもありますから、正しくは六つです。

絵カードには視点があります。

視点の移動ができるというのも確認しなければいけない大切な課題です。

漂泊鳥から
夏休みもあと10日。
やり残していることを一つしあげよう。

=====
ことばだより No.34

ことばのもり 2003.8.13
=====

INDEX

ことば徒然

言語性を伸ばす指導 絵カードを使って

ことば徒然

五つの「聞く」力を子どもがうまく使えていないのは、なぜでしょう
食欲や睡眠といった生理的な欲求、
安心して集団生活を送るといった安全への欲求、
自分の役割や責任を果たし大事にされたい、認められたいといった所属や
愛情の欲求、

尊重の欲求が満たされていないというのも理由の一つではないでしょうか。

このような基本的欲求が十分満たされて初めて、知ることと理解すること
の欲求が子どもに生まれてくるといいます。

子どもの欲求が十分満たされていないことが、子どもを精神的に不安定な
状態を招いているのではないのでしょうか？

この不安が子どもが持っている「聞く」力をうまく使えなくしているの
ではないのでしょうか。

絵カードを使って

その3

2本の鉛筆が描いてある絵カードを見せて、

「どちらが 長いですか？」と問い指さしをさせます。

「これは長い鉛筆です。」とリピートさせて、

「それでは、こっちはなんていうのかな？」と問います。

「どちらが 大きいですか？」
「どっちの足が 多いですか？」
「どっちが 強いですか？」
比較語(「ながい」と「みじかい」、「おおきい」と「ちいさい」、「おおい」と「すくない」、「つよい」と「よわい」)を正しく理解しているか確かめます。

漂泊鳥から
夏休み前半もおわりました。

ことばだより No.33

ことばのもり 2003.8.6

INDEX

ことば徒然

言語性を伸ばす指導 絵カードを使って

ことば徒然

ところが、子どもの1日の生活をふりかえってみると
朝、登校中に「おはよう」と声をかけたとき、眠そうな目をこちらに向け
ます。

しかし、「おはよう」と返ってこない子どもがいます。

目では反応していますが、年齢相応のコミュニケーションが成立していま
せん。

この子にとって「おはよう」というあいさつは、ただ音として「聞こえる」
ということなのでしょうか？

前の日、夜遅くまでおきていたのでしょうか？

長い休みが終わり、園や学校が始まったばかりで、集団生活のリズムが取
り戻せないのでしょうか？

寝坊して朝ご飯を食べないで、出てきたのでしょうか？

家を出るとき、おうちの人におこられたのでしょうか？

出さないといけない宿題ができなかったのでしょうか？

友だちとうまくいっていないのでしょうか？

授業中、先生は子どもにいくつかの指示を出しますが、指示どおりの行動
ができない子がいます。

指示が多すぎて、おぼえられなかったのでしょうか？

指示を理解できなかなのでしょうか？

休み時間に友だちとけんかでもしたのでしょうか？

授業の内容がわからなくて、先生の指示を聞きもらしたのでしょうか？

絵カードを使って

その2

かえる、ウサギ、きつねの絵カードを用意し、並べます。

「お話しするから、よく聞いてね。」

「かえるが、とんだ。

みつけた、みつけた。

あかい はな。」(大阪書籍の1年上国語教科書の「みんな とんだ」か
ら)

「お話しに出てきた動物はどれですか？」

「何をみつけたのかな？」と問います。

「かえるが どうして、あかい はなを みつけたのかな？」

始めの問いに答えるのに、ことばといっしょに、絵カードの支援がありま
す。

次の問いに答えるのに、ことばの支援しかありません。

短期記憶、集中力を確かめます。

漂泊鳥から

少しだけ、夏らしくなってきました。

「今年は、これぐらいにしといたろ。」

=====
ことばだより No.32

ことばのもり 2003.7.30
=====

INDEX

ことば徒然

言語性を伸ばす指導 絵カードを使って

ことば徒然

聞くという力は、次の五つに分けられます。

「聞こえる」「聞く」「聴く」「傾聴」「訊く」です。

「聞こえる」は、聞く意志がなくて、ただ耳に入ってくること

「聞く」は、聞く意志をもって聞くこと

「聴く」は、聞く意志をもち、注意して聞くこと

「傾聴」は、聞く意志をもち、注意を集中して聞くこと

「訊く」は、自分の聞きたい意志を相手にまで及ぼし、答えを求めて積極的に聞き出すこと

という意味です。

この五つの聞くは発達とともに獲得されていきます。

新生児期の子どもは、大きな音に反応し、母子間でコミュニケーションが成立していることから、「聞く」というレベルに達しているといわれます。

乳幼児期に「聴く」「傾聴」「訊く」を獲得していくといわれます。

「聴く」というレベルでは、母親の声が聞こえてくると、探し求める行動をします。

「傾聴」というレベルでは、ことばの模倣をしたり、ことばによる指示に従い行動をします。

そして、「訊く」というレベルでは、「これ、なあに？」と質問する行動をします。

やがて子どもは「聞く」という力を基礎にして、「話す」「書く」といった行動を生み出します。

聞くことで、ことばを発達させていくのです。

また、人は、この五つの聞く力を周囲の状況や、必要に応じてうまく使い分けて生活していきます。

(学苑社の聴覚障害の診断と指導を参考にまとめました。)

絵カードを使って

教育相談に年長幼児が来室します。

検査で絵カードを使い、次のようなことを確認していきます。

その1

りんごとイチゴとみかんの絵カードを3枚並べます。

「この中で一番すきなのはどれですか？」と問い、子どもが選びます。

選んだ絵カードを取って、2枚の絵カードを残しておきます。

「このどちらが好きですか?」と問います。

選んだ絵カードと一番好きな絵カードを並べて、

「どちらが好きですか?」と問います。

順位付けが正しくできているかを確認めます。

乗り物が好きな子どもには、電車、車、自転車の絵カードでもいいと思います。

漂泊鳥から

もう7月もおわりです。

ことばだより No.31

ことばのもり 2003.7.23

INDEX

ことば徒然

言語性を伸ばす指導

ことば徒然

電車の中でこんな子どもと母親を見ました。

母親は子どもと視線を合わせ、子どものことばを繰り返し、助詞をつけたし、さらにそのスピードを説明していました。

子どもが反対の路線を走る電車を見ていました。

すると、

「でんしゃ、いった」と指さしながら、

お母さんの方を見ました。

お母さんは、

「電車が行ったね。はやいね。」

と答えながら、子どもの方を見ていました。

子どもはまたそれに答えるように、

何回か同じことをくりかえしていました。

子どものことばに共感することで、母親と子どもの間に安心感が育ち、子どものことばがふえていきます。

言語性を伸ばす指導

男の子が転んでいる絵カードと傷テープを貼っている絵カードを用意します。

1枚ずつ、お話ししてもらいます。

その後、一つの文にしてと指示します。

「転んでけがをしたので、傷テープを貼りました。」

「転んでけがをしたから、傷テープを貼りました。」

このあと、ドアを空けて外に出かける絵カードや掃除をしている絵カードを使い、理由を想像して文で表現します。

漂泊鳥から

夏休みです。

子どものことばを育てるいい機会です。